

福江島：人の歴史

五島はアジア大陸に近いため、福江は千年以上にわたって文化交流、海上交易、国防の拠点となってきた。実際、五島列島は文字による記録が残るずっと以前から重要な港であったと思われる。日本最古の書物である 8 世紀の『古事記』には、五島列島について具体的に記されている。

遣唐使

8 世紀、唐時代の中国（618-907）はアジアの政治と文化の中心であった。日本は 630 年から 894 年の間に、外交、研究、貿易を目的として、遣唐使船と呼ばれる 19 隻の遣唐使船を中国に派遣した。702 年から、福江島は大陸への危険な渡航前の最後の中継地として機能し、また彼らの帰りを歓迎する最初の場所でもあった。何世紀にもわたり、遣唐使たちは日本人の生活に大きな影響を与えるような品物や考えを携えて帰ってきた。

彼らが持ち帰った情報によって、天皇たちは唐風の土地改革政策、官僚機構、刑法、都市計画、建築、標準化された測量、人口登録などを制定した。最も影響力があったのは仏教思想であろう。仏教は 6 世紀半ばに朝鮮半島から日本に伝えられたが、その教えは広まっていなかった。しかし、中国の宗教を学んだ 2 人の遣唐使が、学んだことを広めるために帰国した：最澄（767-822）と空海（774-835）である。彼らはその後、日本の仏教に大きな影響力を持つ 2 つの宗派を創設した。最澄は天台宗を創始し、後の天台宗は大衆に仏教を広めることになり、空海の真言宗は平安宮廷（794-1185）の思想と美学、ひいては日本の芸術と文化の軌跡に影響を与えた。

貿易と海賊

遣唐使は 10 世紀に入ると終わりを告げ、唐王朝が衰退し始めると、東シナ海での商人交流が活発化した。この海は、13 世紀から 16 世紀にかけて特に活発な貿易が行われた地域で、福江は中国、朝鮮、（現在の）台湾、日本を結ぶネットワークの中心にあった。この交易の豊かさが海賊行為や、朝鮮半島や中国沿岸の集落を襲う倭寇と呼ばれる略奪者の台頭を引き寄せた。この時代の初期の数十年間、これらの海賊はしばしば日本の藩主に雇われており、藩主は海賊を派遣して、住民がその気になれば貿易に従事させ、拒否すれば海賊行為を行った。その後、通商条約によってこの活動の一部は抑制されたが、17 世紀に日本と中国で中央勢力が台頭すると、ついにこの活動は終焉を迎えた。

13 世紀から 16 世紀にかけて貿易が盛んだった時代、福江には中国人商人や海賊が多く住み、現在の福江市には中華街が築かれた。1561 年の中国の地図には、福江島が九州とほぼ同じ大きさで描かれており、福江島の相対的な重要性がうかがえる。当時の建造物はほとんど破壊されてしまったが、唐人町という地名や、中国風の建築様式で再建された明人堂にその面影を見ることができる。

幕府の支配

17 世紀初頭、徳川幕府（1603-1868）はライバルを打ち破り、日本の権力を一元化した。徳

川将軍家は、比較的平和で安定した時代を監督し、半自治領制度を支配した。この時代の特徴は、武士階級の支配と、外国の影響や介入に対する警戒心であった。

福江は、貿易と海賊行為の時代に権力を掌握した後藤家が率いる福江藩（後藤藩とも呼ばれる）の一部だった。彼らは徳川家に忠誠を誓い、領地の維持を許された。1634 年、後藤盛俊は家臣たちに福江の権力の座の周辺に居住することを要求し、福江は典型的な城下町となった。この家臣たちが住んでいた界隈は、今も武家屋敷通りとして保存されている。何世紀にもわたって幕府に陳情し、1849 年により築城の許可が下り、福江城（石田城と呼ばれることもある）となった。築城には 14 年の歳月が費やされ、三方を水に囲まれた城は、外国軍の侵攻を恐れていた当時、海上防衛のために築かれた。しかし、そのわずか 9 年後、徳川の支配が終わり、日本の城が武士の権力を思い起こさせる歓迎されないものとなったため、石田城は取り壊された。残された外壁は今でも福江の中心部で見ることができる。

1614 年、徳川幕府はキリスト教を非合法化し、あらゆる信仰表現を残酷に弾圧した。しかし、福江の地政学的な立地が貿易と文化の中心地であった一方で、人里離れた入り江と険しい地形は、避難場所として最適であった。17 世紀から 18 世紀にかけて、九州から追放されたキリシタンたちがこの島に定住した。いわゆる「隠れキリシタン」と呼ばれるこのような集落の多くは現在も残っており、仏教の影響を受けたカトリックの図像で飾られた地元の教会が目印となっている。